P－46

認知指標によるEMDRの効果の検討

－PTSDと注意との関連を含めて－

○森田　桂　　市井雅哉

（嘉手納町青少年センター）（琉球大学教育学部）

研究の目的

眼球運動による脱感作と再処理法（Eye Movement Desnsitization and Reprocessing：EMDR）は、1989年にShapiroによって提唱された新しい心理療法である。Shapiroが最初の研究を発表してから10年以上経った現在、EMDRはPTSDに効果的な治療法であるという一定の評価が得られるようになっている。しかし一方で眼球運動の治療効果に対しては懐疑的な意見も多く、作用機序の解明が急がれている。本研究の目的は、過去の外傷体験を思い出してもらいながら眼球を動かすという治療過程のメカニズムを明らかにすることである。特に本研究では、治療中の眼球運動は、注意を外に向けさせ外傷体験の記憶ネットワークへの注意を減少させる役割を担っているというWells &Matthews（1994）らの理論に注目し、認知指標を用いてその効果を検討する。

予備調査

【目的】

日常生活における現在への注意指標を作成し、信頼性と妥当性を検討する。

【方法】

健常な大学生28名（男性15名、女性13名、平均年齢＝21.6歳（SD=2.28））に対して、筆者らが作成した「日常生活における現在への注意指標」およびBDI（林,1998）、IES-R（飛鳥井,1999）を実施した。その後2週間の期間をあけて再度、日常生活における現在への注意指標を実施した。「日常生活における現在への注意指標」の内容は、1日の中で起きている間を考えた時、注意をどれだけ「今、ここ」という現在目の前にある環境に向けているかという主観的感覚を0%～100%スケールで評定してもらうものである。

【結果と考察】

信頼性係数として、質問紙実施1回目と2回目における得点の相関係数を算出した結果、r=.81と高い相関が得られた。

日常生活における現在への注意指標とBDIとの相関係数を算出した結果、2つの間に有意な相関は見られなかった（r＝－.35,n.s）。次に、日常生活における現在への注意指標とIES-Rとの相関係数を算出した結果、r＝－.40とある程度高い負の相関が見られた。

研究I

【目的】

外傷体験がPTSD患者の外部刺激への注意コントロールに及ぼす影響を明らかにする。

【方法】

1．対象

健常群：大学生12名（男性6名、女性6、平均年齢＝26.3歳（SD＝8.99））、高ストレス群：大学生9名（男性1名、女性8名、平均年齢20.3歳（SD=1.32））、PTSD群：一般市民9名（男性2名、女性7名、平均年齢34.1歳（SD=15.95））の3群を設定。

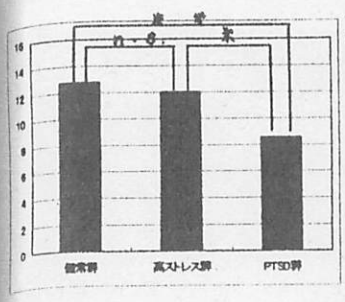
2．材料

①数唱課題（日本語版WAIS-R成人知能検査法, 品川ら,1990）、②日常生活における現在への注意指標。

【結果】

各群の数唱得点及び注意得点の平均値をFigure1-1、1-2に示す。

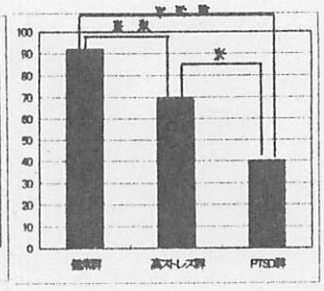
数唱得点において、健常群および高ストレス群よりもPTSD群の得点が低くかった。また、日常生活における注意指標では、健常群、高ストレス群、PTSD群の順に現在への注意が低下していた。



***<.001　**<.01　*<.05

Figure 1-1.

WAIS-R の数唱得点平均値



***<.001　**<.01　*<.05

Figure1-2.

現在への注意得点平均値

研究Ⅱ

【目的】

研究Ⅰで検討した指標を用いてEMDR前後の外部刺激への持続的注意の変化を明らかにする。

【方法】

1．対象

精神科・心療内科から紹介された患者、および新聞での治療参加の呼びかけに応募してきた人の中から、アセスメント時のスクリーニングで基準を満たした10名(男性3名、女性7名、平均年齢34..5歳 (SD=15.09))。

2．材料

研究Ⅰと同様。

3．手続き

プリテスト後、EMDR の標準プロトコルに基づいて治療を行った（面接は1回あたり60分～90分)。治療回数は上限3回。治療はEMDRの正式なトレーニングを終了している3名の治療者が行った。治療終了後ポストテストを実施した。

【結果】

治療後の数唱得点は、治療前に比べて有意に高くなった（$t(6) = -2.47, p<.05$)。一方、順唱得点、逆唱得点のみでは改善が示されなかった（$t(6) = -.98$,n.s.; $t(6) = -.92$,n.s.)。また、治療前と比べて、治療後の現在への注意の主観的得点は、治療前と比べて上昇する傾向が見られた（$t(6) = -2.34, p<.10$)。

研究Ⅲ

【目的】

持続性注意の改善が見られた事例と見られなかった事例を通して、治療中の分配性注意と治療後の外部刺激への持続性注意の関係を明らかにする。

【方法】

1．対象

研究Ⅱにおいて、介入を行った対象者の中から、外部刺激への持続性注意で最も改善が見られた1名(10代女性）と、全く改善が見られなかった1名（30代女性)。

2．材料

「主観的注意分配指標」(EM時において、過去の外傷体験および身体感覚と目の前の刺激にどの程度の注意が向いていたか0%～100%スケールで評定)。

3．手続き

介入1回目から3回目までのEM中、目の前の刺激（眼球運動を促す光のバー）と過去の外傷体験および身体感覚にどのぐらいの割合で注意を向けていたかをポストテスト時に回答。

【結果】

持続性注意の改善が見られた対象者は、回数を重ねるごとに外傷体験の記憶および身体感覚への注意が減少し、目の前の刺激への注意が増加していた。一方、持続性注意の改善が見られなかった対象者は、回数を重ねるごとに目の前の刺激への注意が減少し、外傷体験の記憶や身体感覚への注意が増加していた。

総合考察

研究Ⅰの結果から、PTSD患者においては外部刺激への注意コントロールに障害が生じている。外部への注意が必要である課題場面において注意を外に向けられないということから、PTSD患者は日常生活においても外部に注意を向けることが困難であることが示唆される。また、研究Ⅱでは、数唱得点、現在への注意の主観的得点の改善から、EMDR における外部刺激への注意コントロールが改善されること、研究Ⅲから、外部刺激への注意コントロールが改善される過程では、眼球運動が外傷体験の記憶ネットワークへの注意を減少させる役割を担っていることが示唆された。これらのことから、EMDRにおける眼球運動は、Wells & Matthews (1994) が述べたように、外傷体験に向きがちなPTSD患者の注意を「今、ここ」という現在へ向けさせる刺激としての役割を果たしているのではないかと推測される。

主な引用文献

Wells, A., & Matthews, G. 1994　Attention and Emotion：A Clinical Perspective.（ウェルズ,A.,&マシューズ,G.　箱田祐司・津田彰・丹野義彦（訳）2002 心理臨床の認知心理学－感情障害の認知モデル　倍風館)